オプション教材（きょうざい）リンゴ 暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

暗唱長文 中３ 7月　骨董はいじるもので

1骨董はいじるものである。美術は鑑賞するものである。そんなことをいうと無意味な酒落のように聞こえるかも知れないが、そんなことはない。2この間の微妙な消息に一番早く気づいたのは骨董屋さん達であって、誰が言いだしたともなく、鑑賞陶器という、昔は考えてもみなかった言葉が、通用するに至っている。3言葉は妙だが、骨董屋さんの気持ちから言えば、それはいじろうにも、残念ながらいじれない陶器をいうのである。鑑賞陶器という新語の発明が、いつごろか無論はっきりしないが、おそらく昭和以後の事であろうと思えば、日本人が陶器に対して、茶人的態度を引き続きとっていた期間の驚くほどの長さを、今さらのように思うのである。

4僕は、茶道の歴史などにはまるで不案内であるが、茶器類の不自然な衰弱した姿が、意外に早くから現れているところから勝手に推断して、利休の健全な思想は、意外に短命なものだったのではあるまいか、と思っている。5しかし、茶道の衰弱と堕落の期間がいかに長かったとはいえ、器物の美しさに対する茶人の根本的な態度、美しい器物を見ることと、それを使用することが一体となっていて、その間に区別がない、そういう態度は、極めて自然な健全な態度であるとは言えるのである。6焼き物いじりが僕にそのことを痛感させた。僕も現代知識人の常として、茶人趣味などにはおよそ無関心なものだが、利休が徳利にも猪口にも生きていることは確かめ得た。7美しい器物を創り出す行為を美しい器物を使用するうちに再発見しようとした、そういうところに利休の美学（妙な言葉だが）があったと言えるなら、それが西洋十九世紀の美学とほとんど正面衝突をする様を、僕の焼き物いじりの経験が教えてくれた。8そしてこの奇怪な衝突は、茶人が隣の隠居となり終わった今日でも、しかと経験し得るものなのである。

9先日、何年ぶりかでトルストイの「クロイチェル・ソナタ」を読み返し、心を動かされたが、この作の主人公の一見奇矯と思われる近代音楽に対する毒舌は、非常に鋭くて正しい作者の感受性に裏付けられているように思われた。0行進曲で軍隊が行進するのはよい、舞踏曲でダンスをするのはよい、ミサが歌われて、聖餐を受けるのはわかる、だが、クロイチェル・ソナタが演奏される時、人々は一体何をしたらいいのか。誰も知らぬ。わけの解らぬ行為を挑発するわけの解らぬ力を音楽から受けながら、音楽会の聴衆は、行為を禁止されて椅子に釘付けになっている。

行為をもって表現されないエネルギーは、彼等の頭脳を芸術鑑賞という美名の下にあらゆる空虚な妄想で満たすというのだ。何と疑い様のない明瞭な説であるか。心理学的あるいは哲学的美学の意匠を凝らして、身動きも出来ない美の近代的鑑賞に対しては、この説は、ほとんど裸体で立っていると形容してよいくらいである。周知のように、トルストイは、ここから近代芸術一般を否定する天才的独断へ向かって、真っすぐに歩いた。無論そんな天才の孤独が、僕の凡庸な経験に関係があるわけはない。ただ、彼が遂にあの異様な「芸術とは何か」を書かざるを得なくなった所以は、彼が選んだそもそもの出発点、彼の審美的経験の純粋さ素朴さにある。その裸のままの姿から、強引に合理的結論を得ようとしたところにある。これは注意すべきことなのである。

もし美に対して素直な子供らしい態度をとるならば、行為を禁止された美の近代的鑑賞の不思議な架空性に関するトルストイの洞察は、僕達の経験にも親しいはずなのである。昔は建築を離れた絵画というような奇妙なものを誰も考えつかなかったが、近代絵画には額縁という家しか、本当に頼りになる住居がなくなって来ている。

（小林秀雄の文より）

暗唱長文 中３ 8月　　たとえば、路傍のぬかるみの中へ

1たとえば、路傍のぬかるみの中へわざと踏みこんでゆき、ぬるぬるの泥の感触を楽しみ、泥水のはねをあげ、もっと深いところを探すことの喜びとは、いったい何だったのだろうと思うことがある。2今ではたとえ長靴をはいていたとしても、私はぬかるみを避けて、固い地面を探す。だが子どもは、ぬかるみを見れば当然のようにそのほうへ突進し、飽くことがない。3たまにそんな子どもの楽しみかたにひかれて、おそるおそるぬかるみに足を出すこともあるにはあるが、私たちおとなは長靴の中に泥水が浸入してくることの心持ちわるさや、帰宅したあとの長靴洗いの面倒くささのほうにすぐに心が向いてしまって、子どものように全身全霊をあげて楽しむことはまずないと言っていい。

4子どもがぬかるみの中を、嬉々として跳ねまわっているのは、おとなにとってあまり快い眺めではない。私たちはどちらかと言うとそれを制止したがる。5きたならしい、着ているものが汚れる、無駄なことだ――おとなたちはいつも制止するのに十分な理由をもっていて、それを疑うこともしないのだが、そういう心の奥に、ほんの少しではあっても喜びの感情もまた、ないではない。6嬉しがってる子どものいきいきした動作や表情のかわいらしさに、おとなはしょうがないなと思いながらも寛大になる。似たようないたずらがこよなく楽しかった自分の子ども時代のことも、思い出すともなく思い出している。7そんなおとなの心の動きを子どもはいち早く見抜いていて、本気になっておとなが怒り出すまで、はしゃいでいる。

だが、だからと言って、おとなが子どもにとってのぬかるみ遊びの無意味の意味をほんとうに理解しているかどうかは疑わしいのではあるまいか。8おとなはいわば子どもを、そして自分の子ども時代をもう外側から眺めるしかない存在だ。子どもをみつめることでおとなが感ずる喜びと、子どもそのものであることの喜びはちがう。9そのことに私は時折、越えがたい断絶感を味わう。もういちど子どもに戻りたいと思うのではない、こどもには存在していて、おとなにはすでに存在し得ぬ感情がたしかにあるという一種の絶望感、人間という生物が成長してゆくみちすじで、そのような感情を失ってゆくことを、いったい何が正当化するのだろうかという疑問、私の心の中に浮かぶのはそんな思いだ。

0ぬかるみにうつつを抜かしているとき、子どもは着ているものが汚れることや、あとになって長靴を洗わねばならぬことを気にしてはいない。子どもは文字通り一所懸命に、その瞬間その場を生きている。他のことに心を向けるゆとりが全くないほどに、その喜びは深く全身的なのである。結果を考えろ、親の苦労を、或いは他人の迷惑を考えろと言ったところで、通じようがない。子どもにはそのとき、いわば未来もなければ、社会もない。だから子どもは子どもさ、人間よりはけものに近いんだとおとなは言う。だが喜びという感情は、本来そういうなりふりかまわぬ、自分勝手な、むしろ野性的と言っていいような心の状態だったのではあるまいか。

そのことにおぼろげながら感づいているからこそ、おとなは子どものいたずらを大目に見る。ぬかるみがあるのに、それに見むきもせぬ子どもがいたりするとかえって心配になったりする、ぬかるみに踏みこめば叱るくせに、そうしない子どものことは、子どもらしくないと断罪しかねない。そんな矛盾した心の動きの中に、私たち人間の喜びというものの見かたがかくされていると私は思う。

（谷川俊太郎の文より）

暗唱長文 中３ 9月　　この本をひもとくたびに

1 この本をひもとくたびに、いつも私の心にとどまるのは、冒頭の有名な一句である。どの段を読んでも、最後はきまってここへ戻ってくる。**2**「つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、こころにうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ」という一節は、そのたびごとに深さを増してくるようだ。

3 冒頭の「つれづれなるままに」という言葉が最も大切である。退屈まぎれとか、為すこともないままにとか解釈するのはむろん誤りであろう。そういう一種の倦怠感を宿してはいるが、根本には何かしらやるせない気持と異常の孤独が察せられる。**4** それを決してあらわには告げない。事もなげに、ゆったりと構えているようにみえ、筆致また軽妙を旨とする。その点、「おのづからのまにまに」と云った思いに似かようけれど、この語のもつ明るさ、のびやかさに比べると、知的にやや仄暗い感じがつきまとう。**5** 切迫した不安を伴いながら、焦慮するでもなく、行方を定めるでもない。云わば明暗のあわいに、心はとりとめもなく回転して行く。明晰にして明晰を意識せず、何ものかに憑かれているようで、妙に自意識は冴えわたる。**6** 好奇心と放心との同時的存在。恐らく兼好みずから、かような心境をもてあましていたのではなかろうか。「つれづれなるままに」苦しかったのだ。「あやしうこそ物ぐるほしけれ」という結句が、この間の微妙を告げているであろう。

7 すべて真向の情熱から語った人の文章には、どこかどぎついものがある。殊に人間の生死については、ことが異常であればあるほど臭みを帯び易い。**8** 真向の情熱や真正面から取り組むことは、正しい態度にちがいないが、何がほんとうに真向真正面であるか、これはむずかしい問題だ。兼好の文章は、興味のままに筆を走らせているところ、一見、好事家と傍観者の相を呈する。**9** この外相がかなり人々をあやまったように思われる。徒然草は随筆なりという安易な定義と、併せて随筆の「気軽さ」なる心理が瀰漫した。この言葉のもつ一種の狂気は、見失われてしまったようである。

0 兼好は人生万般を決して真正面からなど見ていない。つまり彼の凝視は直線的でない。例えば陶器鑑賞のように、あらゆる角度から異なった光線のもとに眺め、裏をかえし底をみつめ、丁寧に撫でまわして一々の触感を試み、ついに自己と対象との刹那間に共通の体温を保とうとする。この共通の体温の上で、しかも彼は一切を語ろうとはしない。人生の表裏に徹すれば、一切を語ることの不可能はよくわかるはずだ。ただ微笑を浮べる。事物そのものでなく、それが地上に投ずる翳のみを語る場合もあろう。

彼のものの見方は、見ずして見る、或いは見て見ぬ様子をする、しかもよく見ている風で、好奇心と放心が同じ波紋を呈してひろがる。矛盾撞着など眼中にない。鋭く、辛辣だが、鋭く辛辣に書こうなどとは思っていない。強烈な自意識を内に湛えながら、これにふわりとした節度を与える。筆をおろさんとする刹那の気構えからいえば、「つれづれなるままに」とは、この微妙な調子を整える心琴の撥合せとも解されよう。そこから類のない微笑が湧く。すべてをあらわに語りつくそうという人は、兼好にとって共に談ずるに足らなかったであろう。彼は好んで余情陰翳に住せんとした人のごとく思われる。（中略）

兼好は晩年、京都雙ケ岡に住んでいたと伝えられる。

ちぎりおく花とならびのをかのへにあはれいくよの春をすぐさむ

「ならびのをかに無常所まうけてかたはらにさくらをうゑさすとて」と題して、右の一首が家集にみえる。彼がここで歿したかどうか明らかでない。遺言辞世なく、傍らに侍した人の手記らしいものも残っていない。最後の有様は窺うべくもないが、おそらく兼好は、息をひきとらんとするとき、「うむ、なるほど」と心にうなずいて瞑目したのではなかろうか。

（亀井勝一郎「古典的人物」による）